Ch.ロドイダンバ「清きタミル川」における女性像の変化について

東京外国語大学大学院　佐護愛

本発表は、Ch.ロドイダンバの長編小説「清きタミル川」に描かれる女性登場人物の特徴を、小説内での女性たちの変化という観点から考察することを目的としている。

1914 年から 1932 年が舞台である「清きタミル川」には、当時のモンゴルを生きた各階層の多様な登場人物が描かれる。女性登場人物を見ても、封建諸侯の美しい妻から、使用人として働く貧しい牧畜民女性まで、その世代や身分、性格、辿る運命はさまざまである。こうした女性登場人物たちの特徴として、人民革命を契機に、それまでの抑圧された古い考え方や自身の置かれた状況、周囲の男性に翻弄され、その言いなりになっていた受動的な立場から、新しい知識を身に着け、自分の道を自分で選択して行動を起こすという能動的な立場へと、その生き方を変化させていることが挙げられる。

しかし、この「受動的な女性から能動的な女性への変化」という単純な図式だけでは、「清きタミル川」の女性像を完全に捉えることはできない。本発表では、上記のような小説の展開に伴う女性像の変化に加え、時代や社会体制が変わっても変わらない要素にこそ女性たちの本質があるのではないかという仮定から、能動的な女性へと変化した後も変わらない要素にも着目する。

発表ではまず、「清きタミル川」においてどのような女性が描かれているのかを概観する。そして小説の展開にしたがってそれぞれの女性像がどのように変化するのか、反対に変化しないものは何なのかを、主要な女性登場人物であるドルゴルやドルマーらの例から取り上げ、考察する予定である。